〈翻　訳〉

アメリカン・ボード宣教師文書

――同志社女学校女性宣教師を中心として――

〈M. F. デントン書簡―訳および註―〉（2）

阪　上　敦　子　監訳
柿　本　真　代
吉　岡　弘　子
小　林　弘　美
秋　山　恭　子
樫　本　尚　美

書簡翻訳：前号からの続き

〈デントン書簡 446〉【柿本真代 訳】

伊藤さん[1]は申し分ないほどよくやっています。彼女は日に日に素直になっているようで、不機嫌になったりすることはありません。

日本　京都

1889年1月6日

親愛なるコルビー[2]さん

きっと私のことを日本で一番失礼で恩知らずな女性だとお思いでしょう！素晴らしいクリスマスのプレゼント、とても嬉しかったです。私のことをこんなにも気に掛けていただいて、有難うございます。母国を離れて初めて迎えたクリスマスは、あなた方のお心遣いのおかげでとても素晴らしいものになりました。いらしてくださってどれだけ楽しかったことでしょう。是非またお越しくださいね。お会いできたことが私には何よりの助けとなりました。というのは、あなたが神の恩寵と霊的な生活の中で長い経験をされて成長し

てこられたことが、私には将来への励ましや希望、そして理想を抱かせることになったのです。

ところで、素敵なお知らせがあるのです。ウィシャードさんご夫妻[3]とスウィフトさん[4]が、色々な学校を回って素晴らしい仕事をなさっていること、そしてとても、とてもうれしいことに、伊藤なつさんが本気でイエスを受け入れようとしているのをお知らせします。

すべての伝道の場で目を見張るような霊的覚醒が起こっており、大いなる善行がなされようとしていると実感しています。数日前の夜、素晴らしい会合に行って来ました。出席者の中でウィシャードさんが唯一の外国人で、丹羽さん[5]が通訳をしていました。部屋は１年と２年の生徒で混み合っていましたが、皆が神の救いの恩寵を初めて体験して、感動していることがはっきりと分かりました。こんなに顕著な覚醒は、本国でも見たことがありません。

クラークさん[6]が来てくれてとても楽しかったのですが、彼女が金曜には帰ってしまうと思うと、さみしくてたまりません。

それから同封の手紙についてお話しします。覚えていらっしゃるでしょうか、ウースターさん[7]は臨時委員会から大阪へと招かれた方です。もちろん私は色々な理由から、是非ここ京都に来てもらいたいと思っています。彼女は類まれなる教養を持ち、非常に有能な人で私より年上ですが、きっと語学の勉強にあまり時間を割くよりも、教師として働きたがると思います。そんな方ですから京都では大きな助けとなるでしょう。

彼女は讃美歌も歌いますし、オルガンも弾けます「決して上手ではないですが」。裁縫やボンネットに縁どりすることも、理科やラテン語、家庭科も教えられます。私は彼女が大好きです。気取らず、慎み深く遠慮がちな人で、あらゆる点においてレディであり、何よりも非常に信仰深く、かつ実践的な信仰を歩むクリスチャンです。

［委員会で］投票した後で彼女に手紙を書きましたが、この手紙はひとつ前の便で届きました。オルチンさん[8]やゴードンさん[9]は彼女に手紙を書いて

いないのでは、と心配しています。ボードとの打ち合わせが済み次第、すぐに来てくれるよう催促の手紙を出しました。明日来る予定の便で、彼女からの返事が来るとよいのですが。この問題について［大阪］ステーションと話し合って下さいませんか。もし彼女とボードの両方に掛け合って話を進めるお積りがないのなら、そうおっしゃってください。京都ステーションから催促いたしますので。

ウースターさんの来日については、サンフランシスコのサッター通り901在住のルーシー・フェイさん（太平洋ウーマンズ・ボードの会長）[10]と、ロサンゼルス第一組合教会のハッチンス牧師気付でハッチンス夫人[11]に手紙を書けば、一番てっとりばやいかと思います。ハッチンス夫人は私たちの教会の女性宣教会の会長ですし、ウースターさんが来日することになれば、きっと太平洋ウーマンズ・ボードと教会が援助してくれることでしょう。私たちの教会でウースターさんは若い女性宣教会の責任者なので、私は会あてに手紙を書いて仕事の内容を知らせる約束をしたのです。そしてウースターさんを派遣してもらえないかと頼みました。でもこの手紙ではご覧の通り、彼女はまだ私の手紙を宣教会の人たちには見せていないと言っているのです！

リチャーズさん[12]は、普段通り外に出て働いています。他の仕事に加えて、なんと讃美歌のクラスを増やしました！　彼女の日本語の先生は、毎日夕方に英語の手ほどきを受けに来ていますが、驚いたことに、ある晩彼は讃美歌集を手に入ってきたのです。リチャーズさんの指導が気に入ったようで、今もそのレッスンを続けているのです。数日前の夜、クラークさんとスミスさん[13]そして私は、耳に入ってもおかしくないほどの距離に居たのに、リチャーズさんはとても静かに授業をしたので、何が行われているのか分かりませんでした。

（マイクロ・フィルムでは書簡はここで切れている）

1. 伊藤なつ　恐らく同志社女学校の生徒であろう。
2. Colby, Abby Maria（1847-1917）　1879年5月来阪。梅花女学校最初の専任宣

教師として着任し、生涯梅花女学校 高等女学校で教鞭を執った。伝道にも精力的で、とりわけ堺伝道では重要な働きをなし、堺教会を設立へ導いた。1917年大阪で没。墓は神戸市立外国人墓地にある。

3. Wishard, Luther de Loraine（1854-1925） 米国キリスト教青年会（YMCA）同盟学生部主事、世界最初の学生 YMCA 主事。世界 YMCA 同盟の代表者として全世界歴訪、1889年１月から９か月間滞日。全国各地で伝道集会を行い、特に1889年夏学期終了直後の２週間、同志社での伝道集会では多くの学生を同志社教会に結びつけた。
4. Swift, John Trumble（1861-1928） コネチカット州出身。エール大学卒業。1888年英語教師として初来日。1889年の同志社の伝道集会には Wishard と共に来学、伝道に携わる。1922年再来日し、10年にわたり YMCA 運動を指導、東京 YMCA 会館を建設した。
5. 丹羽清次郎（1865-1957） 東京キリスト教青年会（YMCA）初代総主事。大阪生まれ。1883年同志社神学校入学、1890年に卒業し、東京 YMCA 主事を1905年まで務めたのち、同志社英学校校長に就任。1907年に同校を辞し、その後は生涯 YMCA の活動に貢献した。
6. Clark, Martha Johnson（1862-1950） Mount Holyoke Seminary 卒業。ウーマンズ・ボードの女性宣教師。1888年に来日、熊本ステーション配属となる。1892年、H. Pedley と結婚。
7. Miss Wooster 詳細不明
8. Allchin, George（1852-1935） 1852年イギリス生れ。1882年、宣教師として来日。伝道に従事する一方で、日本における讃美歌を研究し、組合教会と一致教会との合同の讃美歌集『新撰讃美歌 譜付』（1890）を編纂・発行した。1907年から1918年まで神戸女学院理事、1919年帰国。
9. Gordon, Marquis Lafayette（1843-1900） アメリカン・ボード宣教医。1872年来日。1879年から1899年まで同志社神学校で教えた。1886年、二度目の帰国の折、子供達（Fanny と Mary）の学校の教師をしていたデントンと出会い、アメリカン・ボードのクラークに紹介した。詳細は【*Asphodel* 49, p. 102】参照。
10. Fay, Lucy 太平洋ウーマンズ・ボードの第３代会長（在任1883-1890）。
11. Mrs. Hutchins カリフォルニア・ロサンゼルス第一組合教会のハッチンス牧師 Robert G. Hutchins（在任1888-1894）の夫人であろう。
12. Richards, Linda Ann Judson（1841-1930） アメリカで最初の有資格看護婦。アメリカ看護史にその名を残すほどの人物。ニューヨーク州生まれ。ニューイングランド婦人小児病院で看護教育を終える。1877年には渡英、ナイチンゲールからも薫陶を受ける。1886年来日。京都看病婦学校初代校長、1890年離日。詳細は

【*Asphodel* 49, p. 106】参照。

13. Smith, Ida Victoria（1856-1922） 1883年 Mount Holyoke Seminary を卒業後、ニューヘイブン・コネチカット看護婦学校で学び1888年卒業。リチャーズを助けるべく来日、京都看病婦学校（1888年12月から89年９月、1890年９月から91年７月）で活躍した。

〈デントン書簡 230〉【吉岡弘子 訳】

〔ジュエット夫人[1]への手紙の抜粋〕

日本　京都

1889年１月

ここ数週間楽しいことが重なっています。

クリスマスと新年は楽しいものでしたし、先週にはミッションの集会がありました。

集りには多くの人が出席されて、他の宣教師の方々ともお会いできてとても嬉しかったです。希望と熱意に溢れていて、何て気高く献身的な方々なのでしょう！　一部の集会に出席しただけでしたが、皆さんの目的に向かうひたむきさと神への献身のお姿にはますます感激しています。

およそ１年も前のことですが、リチャーズさん[2]が岡山を訪ねた折、おしらさんというクリスチャンの少女に興味を持ちました。父親は彼女にひどい扱いをして、髪の毛をつかんで家中引きずり回すことさえありましたが、おしらさんは決して信仰を捨てようとはしませんでした。リチャーズさんは彼女を京都に連れてきて、今や上手に調理もできて大変役に立つ女中になりました。彼女は看護婦希望で立派にそうなれる人ですので、リチャーズさんは看病婦学校に入れる年令になれば、必要な費用を出してあげると約束しています。父親がこんなに思いやりがないにもかかわらず、稼ぎの殆どを仕送りしていました。そしてここで手伝いの男手が必要となった時には、父と母両方を呼んでほしいと頼みました。

リチャーズさんは祈祷会と教会に両親が必ず出席して、思いやりを持って

礼儀正しくすることを条件に呼んでもよいと、ようやく首を縦に振りました。両親は［岡山から］やってきて、リチャーズさんとおしらさんは両親のために心から祈りキリスト教を教えました。その結果、先週の日曜日、嬉しいことに両親は受洗することになりました。私にはとても幸せな体験でした。日本の教会で経験する初めての聖餐式でした！　16人が教会員になり、しかもそのほとんどが若者で、熱心で頼もしい男女でした。しかし何よりも幸せなのは、老夫婦が教会員に加わるのを目にしたことでした。

大晦日に、大勢のひとが聖なる火を縄に灯しているのを見て［八坂神社のおけら参り］、とても驚いて、「日本は決して救済されることはない」と感じるほどでしたが、この日の礼拝から、神が重大なことはご自身の手中に収めておられることが分かります。聖餐式で彼らとパンを分け合うことで私は強められました。

1. Jewett, Alice D.　太平洋ウーマンズ・ボードの第４代会長（在任 1890–1899）。
2. リチャーズ　前出〈446〉

〈クラーク書簡 C-2[1]〉【小林弘美 訳】

1889年１月28日

拝啓　デントン様

１通しかまだお手紙を頂いていませんが、希望に満ち、元気溢れる内容でした。他の人たちからは何回かあなたのことや、お仕事がうまく行っているというよい報告を聞いております。カリフォルニアの後援者の方々[2]からは便りはありませんが、あなたが男子生徒を教えなくてもよくなるまで、そのような状況[3]を快く寛大に受け入れてくれていると思います。本国で細かいところまですべて厳密に計画を立てるのは容易ではありません。かなりの許容範囲は認めなければなりませんし、これは通常、宣教師の間でもそういうつもりでやってくれています。調整が十分に行われて恒久的なものになるまでには、ある程度時間が必要です。最初から枠にはめすぎず、最後には一番

よい結果を手に入れるというのが実際的なのです。

キリストに在って、くれぐれも宜しくお願い致します。

敬具

N. G. クラーク[4]

1. クラーク書簡の番号は、宣教師からの本部宛書簡の様に、アメリカン・ボード本部で付けられた整理番号がないので、デントン宛に到着した順序に従って、C-1, 2, 3…と記述する。
2. デントンのような女性宣教師の海外での仕事を支援している、太平洋ウーマンズ・ボードの女性たち。
3. デントンは日本到着の最初の１年間は、最初の予定とはちがい同志社英学校で男子の授業を2クラス持たねばならなかった。
4. Clark, Nathaniel G.（1825-1896） アメリカン・ボード総主事。1865年から1894年ボードを引退するまで外国通信部の全責任を引き受けた。クラークの行政の最も顕著な特徴は、日本ミッションとウーマンズ・ボードの開設である。

〈クラーク書簡 C-3〉【秋山恭子 訳】

［デントン書簡〈446〉への返信］

1889年５月10日

拝啓　デントン様

１～２日前にお葉書を受け取りました。手紙でなくても嬉しく思いました。お葉書では、ウースターさん[1]はあなたのお招きに応えられないようですね。彼女が［日本へ］行けないのは大変残念です。ウースターさんが所属している教会の牧師夫妻、牧師はアメリカン・ボードの協力メンバーですが、はっきりと反対されていました。残念ながら、とても日本に行くだけの健康は持ち合わせていないとのことでした。

パーカーさん[2]についても書いておられます（姓はその通りだと思いますが、下の名前が読めないのでどこの誰か確定できません）。お聞きおよびでしょうが、この手紙が着く前に、日本ミッションを補強するため、最高の女性4名を任命しました。少なくとも４人のうちの一人は京都、そしてもう一

人は大阪の人員不足を補ってくれると信じています。あなたに関しては好ましい報告をいくつも聞いており、あなたを送り出したのはまさに適材適所だったと感じています。あなたにはそこが最も豊かで夢や抱負を満たすのに十分な伝道の場となっていることでしょう。

敬具

N. G. クラーク

1. ウースター　前出〈446〉
2. Miss Parker　詳細不明

〈デントン書簡 447〉【小林弘美 訳】

日本　京都

1989年 6 月12日

拝啓　クラーク博士

以前、この件についてお手紙を書きましたが、お返事がないので、もう一度私のお願いをお伝えいたします。リチャーズ[1]さんのお考えでは、通常、家事の切り盛りのために家計費として認められている75ドルを私ももらえる筈とのことです。非常に申し上げにくいのですが、年末には借金をしていることになりそうです。断れない訪問客が多数あり、その上、家を整えるのに雑費がかさみますので、お給料では全てを賄いきれません。女性宣教師は誰もできていないのです。皆、本国から多少のお金は持参していますが、私の場合はまさに「少」です。

来年はどうしてもミシンを入手しなければなりません。新人の看護婦が入ってくると制服の縫製を指導しなければならないし、多くの場合、私たちが縫わなければならずぜひともミシンが必要なのです。

家に備えなければならない必要な品々がまだ他にもありますので、通常の助成金をお願いいたします。このような依頼は太平洋ウーマンズ・ボード宛にしないといけないのでしたら、そちらへ転送していただけませんか。

できるだけ早く確実なお返事をお願いいたします。

どうぞよろしくお願いいたします。

敬具

M. F. デントン

1. リチャーズ　前出〈446〉

〈デントン書簡 448〉【阪上敦子 訳】

日本　京都

1889年６月12日

拝啓　クラーク博士

異教的なものを我慢する助けをたった今ひとつ見つけました。それは昨夜イザヤ書11章[1]を勉強していると、若者たちがすばらしい予言にあまりにも素直に大きな喜びと興味を示したので思い浮かんだのです。時が経つにつれて、その思いはますます深くなってきたのですが、あの人たちのような強烈な喜びは、私たちのように生まれてからずっと聖書を読み続けてきた者にはないのです。事前の予備知識もなくイザヤ書を初めて読むことが、どれほどすばらしいことか考えてみてください。子供のころからこの予言の真実に親しんでよく知っている私たちには全く分からない大きな喜びを、この学生たちは知って最大限楽しんでいるようです。非常に個性豊かな学生たちです。一人ひとりと知り合ってその熱心な姿を見て、将来どんな可能性があるのかを実感するのは大きな特権です。私が教えている全教科の内で、３人の別課[2]神学生がこのイザヤ書の勉強のために部屋に来る、この「火曜日の午後７時から８時」ほど楽しい時間はありません。

こんな唐突な書き出しをお許しください、そしてもし私があなた様に……

（以下、１行マイクロ・フィルムでは読めない）

書いているならお許しください。

手紙をきちんとお出ししないのは、あなた様への同情からということを信

じてください。きっとうんざりするほどの宣教師書簡を受け取っておられることでしょう。ご親切なお手紙を有難うございます。私には身に余るほどのお言葉です。日本に来たのはとても浅はかなことでした。私のように不十分な教育しか受けていない女性がこの国に来るべきではなかったですし、語学の学習がこんなに苦手では、日本語のような難しい言語に挑戦すべきではなかったのです。12年間も教壇に立っていた女性が日本に来てはいけなかったのです。

（マイクロ・フィルムに１行なし）

……はよいこと［かも知れませんが］、ここでは若い女性が必要だとよく分かりました。少しの経験は助けになりますが、私は全く異なった環境であまりにも長く教えて来ましたし、日本人学生はアメリカ人とは考え方が全く違っていますので、私の経験は邪魔にしかなりません。なぜなら、いけないと知りつつ、［日本での］状況、（変えられない状況）を自分に馴染みのあるものに変えようとしてしまうからです。日本で人間の心を勉強することは、重点が全く異なる新しい分野の発見に繋がります。自分自身のやり方が唯一正しいと思いがちなので（このやり方がよいと過去の経験から分かっている場合には特に）、年を取った教師は尚更不利なのです。

リチャーズさん[3]と一緒に住めて大変光栄です。仕事がよくできる人で、愛すべきクリスチャンを時にはとても不愉快な人にしてしまうような些細な移り気や気まぐれといった気質とは無縁です。すべての点で私を助けてくれる最高のひとです。まさにこの学校での仕事はとても重要で、リチャーズさんは自分のことは二の次にして働いています。

国にいたころ数か月間どこかの聖書学校で過ごせたらよかったのですが……

（以下マイクロ・フィルムが切れている）

新しい仲間には、この準備をせずに来日しないように強く助言いたします。国ではかなり聖書に通じていると言われていましたが、ここでは、国にいる

ときよりも、はるかに多くのことを知っている必要があります。この点については、いくら強く言っても言い過ぎにはなりません。あらゆる知恵を持つソロモン[4]でさえも、日本に住んでいたら辞書を探さないといけないでしょうに。そして新しく来る人にはもう一つ持参するものを付け加えましょう(「新しい」人は、ご存じの通りいつも多く助言されるものです！)。でも来日する全ての人に必ず持たせてほしいのは、沢山の聖書の補助教材、簡略版でない辞書、百科事典、そして教科書です。しかも教科書は多ければ多いほどいいし、出来るだけ幅広いものが望ましいです。

まずは手始めに、来日する女性宣教師のために日本語の読本を4冊、この便でフリントさん[5]宛に送ります。船の中で協力してくれそうな日本人を見つけて、数の数え方を覚えるのを楽しんだり、たぶん仮名も学んだりするでしょう。これで船上での退屈な何時間かを紛らわせるでしょうし、日本での宣教活動の始まりにもなるでしょう。

ハッチンスさんご夫妻[6]が、ウースターさん[7]の健康状態が悪くて来日は無理だと手紙に書いておられると聞いて驚いています。ハッチンス夫人は大変残念だと述べ、ウースターさんの決断はただ引き受けた仕事の責務によるもので、そのために現在のよい給料の仕事をやめることができないのです。ウースターさんは素晴らしい人ですし、そのうち来日するのではないかとまだ信じています。バーモント州ミドルベリーのスー・パーカーさん[8]も、まことに残念ながら来日しません。ここでの仕事はとても興味深いですし、機会もたくさんありますので、私には僅かでも参加できればこの上なく嬉しいです。でもどこか他の場所に行った方がよかったのではとか、国にいた方がよかったのではないかと考える理由も多くあります。日本語は絶対に覚えられません。事務的な事柄についてお話したいですが、これについては別紙に記載いたします。

1. 旧約聖書の「イザヤ書」11章では、エッサイの根株であるダビデの家系から出る新しい芽がキリストであり、約束された救い主が預言されて希望を示す。

2. 同志社では、熊本バンドと呼ばれる若者たちが大挙して転学してきたため、英学校の課程の他に「余科」を設置し、伝道者の養成に努めた。1880年からは速成神学科を設け、それが邦語神学科となり、のちには「別課神学科」と名称変更した。ここには当時社会的経験をした者が多く在籍して各地の教会設立に貢献した。
3. リチャーズ　前出〈446〉
4. ソロモン（紀元前 1011-931頃）　旧約聖書「列王記」に登場する古代イスラエル３代の王（在位紀元前 971-931頃）で父はダビデ。賢人として知られ、古代イスラエルを最盛期に導いた。
5. Flint, E.P.　アメリカン・ボードのサンフランシスコ駐在の社員。デントン書簡〈439〉では営業部長（the business manager）の肩書が付いている。
6. ハッチンス夫妻　前出〈446〉
7. ウースター　前出〈446〉
8. パーカー　前出〈C-3〉この書簡では住所が Middlebury、Vt. とあるが、1890年５月のデントン書簡〈139〉に記載のあるデントンの従兄弟、Dr. Edward Parker と同じ町なので、その家族か親戚とも思われる。デントン書簡〈139〉では、Dr. Parker の妻が亡くなったことと、前回ボードが彼の来日を推進しなかったために、今は来日をためらっているのだろうとの記述がある。この書簡〈448〉でスー・パーカーの来日が取りやめになったのもこれと関連があるとも推察される。

〈クラーク書簡 C-5〉【吉岡弘子 訳】

1890年３月27日

拝啓　デントン様

このところ、あなたからのお便りがありませんが、きっとホワイト校長[1]をある程度補佐されるだけでなく、同志社予備校でも助けとなって良き仕事を続けておられると思います。そのお働きがどんなものか、そしてその仕事での喜びについても、ほんの少しでもお聞かせいただければ幸いです。あなたについて耳にするのはすべて好意的なものばかりですが、お仕事に幸せを感じておられるからきっとうまくいっているのではと思っています。

幾分不安な気持ちであなたからの手紙を待っているのですが、新島氏[2]の死が、私たちが作った［日本の］教会にと同様に、同志社の学生にどれほど

の道徳的、宗教的な影響を与えたか、ということを知りたいのです。勿論そのような感情に頼りすぎるのもいけませんが、これを機会に、皆の心の中に福音のより正しい概念が呼び覚まされるように願っておりました。人を高め、生き方を変える福音の力に導かれて、大勢の人が今は亡き新島氏を動かし支えていたのと同じ力の源を探し求めるようになることを、切に願っております。

ホワイト校長とウェンライトさん[3]によろしくお伝えください、そしてあなたご自身にも。

敬具

N. G. クラーク

1. White, Florence（1845-1931）　マサチューセッツ州アマースト生まれ。1888年２月京都着。同志社の予備校と女学校で教え、同志社女学校の「校長」に就任。教育の高等化やキリスト教教育に一定の成果を挙げたが、インフルエンザのため手足に麻痺を残して1891年６月帰国。詳細は【*Asphodel* 49, p. 110】参照。
2. 新島 襄（1843-1890）　1890年１月23日療養中の大磯で永眠。
3. Wainwright, Mary Ellen（1862-1918）　1862年３月２日イリノイ州生まれ。リボン・アンド・タボル音楽院で学ぶ。1887年に来日。女性宣教師の中で、専門の音楽教育を受けて来日した最初の宣教師。彼女のお蔭で、東京音楽学校留学生と同じ頃に、音楽留学する何人かの卒業生が出た。詳細は【*Asphodel* 49, p. 110】参照。

〈デントン書簡 138〉【樫本尚美 訳】

日本　京都

1890年５月２日

拝啓　ハリス[1]様

あなた様がここに私と並んで座られ、女生徒に与えて下さった幸せをご覧になったらよいのに、と思います。先ず、同志社に贈って下さった莫大な寄附のお蔭で、どれだけ私たちも恩恵を受けているのかお知らせいたします。私たちの学校（同志社女学校）は事実上男子校の一部なのですが、いつも乏

しいお金でどうにかやっていますので、設備が非常に貧弱で、理科の授業としては大変不十分なことしかできませんでした。同志社女学校に赴任して以来、わずかながら理科の授業を教えてきました。そして今学期も不十分な準備のまま、化学の授業をすることになっていました。

ここにいて男子校への追加の援助を羨ましく見ておりました。そして、（法律では禁止されていますが）男女共学を強く希望して、女生徒も下村先生[2]（化学の研鑽を積んで帰国された）の実習を受けられればと願いました。それが実現することになろうとは夢にも思ってみませんでしたが、神様は女生徒のことをお忘れになりませんでした。小川さん[3]が来られて、下村先生は法律の文言では、女生徒が講義に出席して実験を見学するのを許していると考えておられる、と告げられた時には、まさに飛び上がらんばかりに喜びました。すぐに下村先生に会いに行くと、先生はとても親切な方で、願っていた以上に私の希望を認めて下さいました。

毎日午後２時には歩いてここまで講義を受けに来て、月曜日と水曜日には小テストのために残ります。金曜日には急いで昼食をすまし、実験室に12時に入ると２時間の実習のあと、講義も聞くことができます。私たちは皆その授業に行けて大喜びで、誰ひとりとして５分で昼食を食べ終わるのも苦になりません。というのは、生徒たちは12時に終わるはずの授業があるし、私も授業を早めに終えねばなりませんが、下村先生は12時から５時まで教えて下さるわけですから（その間、男子学生は３時から４時まで実習があります）、本当に心から感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、これら全てを男子学生のように女子にも与えてくださったあなた様に何とお礼を申し述べればいいでしょう。女生徒はどれほど授業に満足して喜んでいるか、そしてこの実習でどれだけ助かっているか、あなた様にお便りを差し上げることと思います。昨年も同じ科目を履修した生徒の一人が今年も取りたいと申し出ましたが、「まるで新しい科目のよう」と言っています。私の務めは単に見物するだけで、この楽しい金曜日の午後ここに座っ

て、生徒が試験管で銀を溶かしているのを熱心に見入っている姿を私が見ていますと、最初に述べた通り、あなた様もここに来られてその姿を見て下さればいいのに、という言葉を繰り返すのみです。

寛大なお気持ちでの善き行いにお礼の言葉もございません。そして、いま目の前で建築中の素晴らしい建物を見ておりますと、これら若者の前途に開ける輝かしい未来に思いをはせています。どうぞいつかご自身で、生徒やこの偉大な業を見に来てくださるように願っております。

ちょうど今、日本に広がっている教育の反動の影響を色濃く感じています。だからこそ、今まで以上にあなた様の祈りを必要としています。明日がどうなるか見通しは着きませんが、私たちは希望と喜びに満たされています。福音船は確実に前進しているのですから。

心からの感謝を込めて

敬具

（署名）フローラ・デントン

1. Harris, Jonathan N.（1815-1896）　北米コネチカット州の実業家で上・下院議員やニュー・ロンドン市長を務めた。同地在住の D. W. ラーネッドの母の周旋で、新島襄の理科教育への情熱に応えて10万ドルを寄付。1890年、その寄付金で今出川キャンパスに現存するハリス理化学館が建設され、ハリス理化学校が開校した。
2. 下村孝太郎（1861-1937）　熊本県出身。熊本洋学校で学んだ後、同志社に転入学し、1879年第１回余科卒業生の一人。1885年渡米。マサチューセッツ州のウースター工科大学、さらに、ジョンズ・ホプキンズ大学の大学院で研究した。1890年創立の日本初の私立の科学高等教育機関、同志社ハリス理化学校（現在の同志社大学工学部の前身）の教頭に就任する。1904年から1907年まで同志社の社長を務めた。
3. Mr. Ogawa　詳細不明